



ベストピア Bestopia

ベストピアは
小原靖夫の
個人誌です

2013年2月号
第312号

孫娘の高校入試合格

(1)氷が溶けて春が来る

2月13日9時03分、合格通知を手にししました。嬉しさ大きく感慨無量です。

心にも春が、長い厳しい冬を乗り越えてやってきました。日本の自然は「めぐり」の循環ですから、異常気象とは言え冬の終りは必ずありますが、喜怒哀楽を伴う心の四季は気まぐれです。人間の努力による場合と人間の力を超えている場合がありますが、これらを一緒に授かることは言葉にならない喜びです。

孫娘の場合、本格的な受験準備ができるようになったのは昨年の11月でしたから本人の努力と工夫は並々ならないものがあり、それを知って実感している私には本人と同じ位の嬉しさが押し寄せてきます。「努力は実る」とか「頑張れば出来る」とかいう理屈を超えた実感は過去の苦勞を全て忘れさせてくれます。苦難や苦勞を忘れさせてくれる成功の喜びが心の春をもたらすのです。

孫娘に「将来こんなことがしたい、この学校に行きたい」という欲求、夢、希望が湧いてきたのはブラバンの部活が終わった11月でした。感動の連続ドラマを作り出したブラバン活動、県大会にまで出場できたブラバン活動は受験勉強以上の特訓があり、それを乗り越えての喜びの感動を体験していた強みを十二分に発揮して短期集中の限界への挑戦でした。

(2)成功要因は国語の力

この工夫は全ての人に参考になりますので、ここに記し残します。

①まず、国語に一番力を入れました。急がば回れ、長文の音読から始めました。これは長文の理解力が非常に衰えている72歳になる老人の今の体験に基づく発想でした。

長文の始めの内容を忘れるものですから最後まで読んでも全体の理解が得られないのです。この事実をどうしたら乗り越えられるかと言う私自身の問題を孫娘に実験してみたのです。

1回目は、できる限り速く声に出して読む、その時間を計って記録する。2回目は内容を理解できる速さで音読する、時間を記録する。3回目は起承転結の観点から長文を分割して黙読、要旨をメモする。4回目は、できる限り速く、要旨を理解して読む。5回目に、質問に答える。各回時間の計測をしておく。凄い時間がかかりました。焦る気持ちを成功の信念に置き換えて、励まし合いながら正月の三日間朝から晩まで集中してやりました。孫娘にとっては闇の世界を彷徨っているようであったと思いますが、四日目から自信が出てきました。そこで方針の変更をしました。

一回目から内容を理解できる速さで音読の後すぐに問題を読む。二回目は問題を意識して起承転結メモどりで黙読。三回目で問題に解答する。

音読させることで「どんな読み方の癖があるか」が判りました。一語一語丁寧に正確に読むことで内容の理解が鮮明になることを体験学習させたのです。注意したり、叱ったりするのはなく読み方の比較をして自ら納得するという回り道をしてみました。

読み方の癖は人生の早い時期に修正しておかねば難解文章になると理解するのに苦労し時間がかかります。（私の体験です）

尤も試験では音読できませんから5問の内1問にする、後は黙読で解答する。各回の時間を記録する。子どもは素直に時間に挑戦しますから驚くほど早く成長します。早すぎると正解率が落ちることを自分で判断できます。このことを理解させた上で正解率を上げる訓練をしました。50分という試験時間に縛られず全問解答するには何分かかるかを計測します。難問は時間がかかることもありましたが焦らずに待つ、ここが大事なところ。全問解答すると満点をとるわけではありません。50点のときも65点のときもあります。あるときから時間の短縮と正解率の両方が上昇いたします。このときから時間を50分に決めて何点とるかを前もって言わせてみます。そしてスタートし時間の管理も本人がします。採点は答えを見て自分でします。そして点数をつけます。その後は答えを100パーセント理解するまで自習させます。この訓練を傍について7日間60時間位実行しました。一緒に生活をしておりませんからいつも傍にいてやれるわけではありません。又自律が必要です。その後は専ら自主的に計画を立て自ら問題にチャレンジしました。指示された時間内に何点取れたかを記録する。100パーセント理解するまで自習する。

この完全な自習ができたことで実力がつきます。1ヶ月間で50問近くチャレンジして平均75点、最難関問題で60点取れる自信ができ、テストの2週間前には合格ラインに達しました。

国語の読解力は全ての科目の基礎ですから、この習慣が付くと他の科目でもケアレスミスがなくなります。「出来るはず」から「必ず出来る」に自分を見る目が成長します。

②数学は始めから戦略的な学習方法にしました。なにせ11月からの受験準備では時間がありません。目標を50点にし、捨てる問題とチャレンジする問題の選別をする。得意な問題は100パーセントの正解率にするという方法です。

英語はケアレスミス無くすることを国語の方法で克服していきました。得意科目でもあり合格ラインにありましたので私が教えることはありませんでした。孫は一般入試にチャレンジしたのですが、本人曰く、推薦入学していたら国語をこんなに勉強することはしなかった。国語の力をここまで、このように身につけたのは入試のお陰だと。このように体験を前向きにとらえられるのもこの子の天分なのだと思います。

(3)入試当日も感動

①特に孫娘は筑後で生まれ、小田原、静岡で育ち、宝塚に来るまでに多くの友人と先生がおられ、入試のお守りが20個近くになっていました。3歳のときから知って下さっている八女の先生からは太宰府天満宮のお守りを送って頂いたのですが、「中学受験」と思っておられたとのこと、時間と距離との関係が人生にもたらす「ユーモア現象」をも学ばせて頂いたのです。

校長先生は手作り手縫いのお守りと合格キップ、更に担任の先生は太宰府天満宮の「合格鉛筆」を卒業生全員にくださり、孫娘もその鉛筆を丁寧に削り試験場に持って行きました。配慮はこれに止まらず、試験当日の先生方の対応です。雪空の季節何が起こるか判らないときです。孫が家をでたのが6時15分バスにのり最寄りのJR駅まで約20分ですがここで担任の先生が通過をチェックし励ましてくれます。2つの列車乗り換えの最終の駅で

副担任の先生が通過チェックし励ましてくれたのです。ここは宝塚市の市立の中学校で、予備校ではありません。他の先生も入試終了後も待機して無事終わったことを確認してくれました。教員の労働時間がどうかと問題にする学校も少なくない時代にここまで配慮ができるとは見事、素晴らしいです。

②試験当日はまず国語から始まったのもラッキーでした。前述のように国語力は安定していましたので手応えあり「これはいける」という感じで、英語、数学に進んだのですが、傾向ががらりと変えられ苦戦したようです。しょげて帰って来ましたので、じっくりと話を聞き分析をしてみました。出来なかったところがどのように出来なかったのかと説明をさせました。出来たところはどんな感じで終えられたのかと問いました。孫の答えに「はず」という言葉が全くありませんでしたので出来たところを積算していくと、がっかりするではなかったということが私には判りました。私は「大丈夫」と励ましました。午後から面接試験があり、「これはばっちり」ということで内容をたずねると、試験官の先生が「あなたの長所は？」との質問にたいして①健康であること②笑顔で前向きの姿勢チャレンジ大好き③粘り強く諦めないこと。とニコニコして答えたといえます。先生も笑顔になってくれたといえます。この対応の姿は想像に難くありません。この子の育ちそのものであり、天分なのです。これを聞いたとき私と父親である息子は合格間違いなしと感じました。誰もが普通に経験する高校入試ですが、本人にとっては一大事です。これを家族全員で不安を共有できることは幸せなことです。

(4)卒業式が楽しみ

孫娘は卒業式にはみんなで歌う「道」のピアノ伴奏をするとのことで受験準備のときも忘れずに毎日30分ピアノに向かっていました。今は心晴れやかに練習していることでしょう。感動の卒業式は父兄だけでなく私たちも参加できるとあって楽しみにしています。ブラバンの活動、11年生運動会と地域に感動を与え続ける里山の学校、素晴らしいリーダーシップを発揮されている校長先生とそれに素直に且つ情熱的に教育に取り組んでおられる先生方に敬意を評し感謝、お礼を申し上げます。

滝沢ハルエ夫人の召天

滝沢陽一先生の奥様が1月7日インフルエンザから肺炎に襲われ召されました。葬儀は相模原南教会で行われました。

ハルエ先生と私

個人的な話は半世紀を超えるものになりますので後日あらためて記すことにします。

ここに一点、1994年4月3日のイースター礼拝の思い出を記します。

この年の3月31日、「平和を祈る一念ずれば花ひらく303番碑」をイスラエルのヘブライ大学植物園に献碑するための旅行を企画し、式典を滝沢陽一先生に執り行っていただきました。相模原南教会からハルエ夫人、半間早苗姉、大貫寿子姉、私たち夫婦とその友人、12名が参加者です。

滝沢陽一先生には、山上の垂訓の丘での野外礼拝、訪問教会内での礼拝説教をしていただいた思いで多い旅でした。

この旅のことを「葡萄園第17号付録」にさせていただいておりますが、その一部を掲げます。

「園の墓は、まさに主イエスの時代そのままに露出した岩が、されこうべ(ゴルゴダ)に見える丘に、横に掘った墓があり、これこそ主イエスの墓とされる。全世界からの参加者千二百人収容のベンチを埋めつくす。静かな思いの中に、復活した今も、ここに、私たちと共に生きていました、私たちを愛し、救ってくださる主に感謝の祈りをささげた。説教はロンドン、ウェストミンスター・チャペルのタッパー博士。主の復活の生ける力によって、墓を閉ざした石も除かれたように、私たちの人生におけるさまざまな困難も不安も、そして罪と死が除かれることを説く。讃美歌 148 番、二編 190 番ほか 3 曲がうたわれた聖句はマルコによる福音書 16 章 1 節--8 節。聖金曜日(受苦日)と復活日を聖地で迎えたというのがひそかな願いであったが、今回、小原兄の願いと共に実現し、これほどうれしいことはなく、感謝のほかはない。礼拝中からホテルに帰ってまで、妻の治枝は涙にくれていた。これまでの歩みの思いが、一度にこみあげたのであろうか」

最後の文章が私にとって最も心に残る一文になっています。

滝沢陽一ハルエ夫妻ほどの仲睦まじいカップルを私は知り得ません。陽一先生は常に、そしてここ数年はお会いする毎に「自分がここにこのように在るのは治枝のお蔭である」と仰っておられました。岡崎晃牧師の説教の通りです。実のベターハーフです。これからはハルエ夫人に代わって長女香さん夫妻、孫の愛さん夫妻に引き継がれます。恵まれた家族に囲まれた祝福の豊かな日々が春の訪れと共にやってきます。